

# 甲陽だより

発行所  
西宮市甲子園高野町3番7号  
甲陽学院同窓会  
電話西宮(0788)41-0622 番0623番  
郵便番号 663  
編集者 原 清  
印刷所  
石川印刷出版社  
神戸市兵庫区中道3丁目3番  
電話神戸(078)575-3765 (代)

## 偶 感

### 甲陽学院高等学校長

#### 小 河 清 磨

『彼が夕陽丘を去って間もなく、鐘紡社長より会社の社員に、心理学の講義の依頼を依頼せられた。鐘紡に行く場合は、常に阪神電鉄を利用したのであるが、発展し行く阪神間の前途を思えば、此の間に中学校を設立する必要ありと見た……。彼は、今の甲子園の地を以て、最高のものと思つた。当時甲子園の所は、未だ枝川と称する武庫川に次ぐ大きな川の流れて居た所で、其の右岸は今津、左岸は鳴尾に属した。大正五年の秋の一日、彼は鐘紡よりの掃り序に、今津駅で下車して枝川河畔に立つ……。予定通り工事も進行して、大正六年三月には、校舎一棟は竣工した。机脚その他の設備も間に合い、職員組織も出来たので、三月中旬生徒募集を為した所が、予想以上に多数の志願者を得たので、入試の結果四学級二百二十人を収容して、甲陽中学と命名し、四月初め開校したのである。

愈々開校してから、彼は予て理想とせる郊外気分を發揮し力をついた。第一に昼食は生徒と共に、枝川の芝生の上で、清流を眺めつつ喫べる。湯茶は、当番のものに河畔のテーブルの上に運ばしめる。昼食後は校庭に帰って運動競技を為すものあり、枝川に残って木登りや鮎狩りに興ずるものあり……。実に当初は枝川河畔幾十万坪から、今津海岸に亘って、甲陽健児の独占場の観あり……。云々』  
(伊賀先生著・回顧七十有五年より)  
この「彼」とは、勿論初代校長の伊賀駒吉郎先生です。実に雄大で、若々しく発刺とし

て、希望に満ちた光景だらう。甲陽の四十二年を記念して編まれた写真帳(昭和三十三年)に、当時の写真と共に「回顧」と題して引用されています。

今これを読んで、ふと「価値観」という言葉が頭をかすめ、そしてそれに関連して、数年前聴いた、東大教授中根千枝氏のお話を思い出して居ります。

『私もは故意を持っていければ、必ず通ずるのだという。これは或る意味では真理だが、社会人類学の立場からみると、これほど危険なことはない。故意は通ずるといふことは究極的には云えようが、それぞれ異なる文化に属し、異なる世代の間、さらに生活環境や、心情の違いの大きい場合には、故意をもつてあたつても通じない場合が実際にある。それぞれ異なる価値観のシステムが違うからである。恰も異国語が通じないと同じ原理である。これが人間関係、社会関係の場合には、それが通じ合っているかどうか分らない場合が多い、そこに大きなミス・アンダースタンディングとか、断絶とかが起る』と。

戦後の急激な社会の変革によって、我々の社会は一面混沌とした状態の中にあるようにみえます。この状態が、現在の学校教育を大きな壁に向わせて居ります。これを越えようとして、大げさに云えば、納得のいく甲陽の教育に関する価値観を確立したいと思つて居ります。そのためにも、甲陽の歴史をさぎんでこられた同窓の諸先輩のお話をうかがい、

その古きルールを知り、一方若い生徒達の時代のルールの中にも興味をもって飛び込んでいきたい。しかし、さき程の中根教授は、終りに「価値観の考察は、時代によって随分違う。一つの社会をとつても随分と変つていくが、しかしこれをクロス・カルチャラルにみると、それ程変つていないことに気がつく」と云われるが、そのことを是非たしかめてみたいと思つて居るところです。

## 理事会報告

九月二十六日、本年度大会反省、次年度の方針等について理事会を行ひ。会長以下二十五名参集する。

一、昭和四十九年度夏季大会報告  
参加者として会費納入せられたる金額が金十八万九千五百円、大会支出金二十七万五千五百円、差引金八万五千五百五十円を同窓会経常費より負担する。

本年卒業業者による新構想にて種々設置せられたる後半天候に災いせられ有終の美を達せられなかつたが、是非来年度もこうした会でありたいと思ふ。

一、甲陽だより発行について  
年会費を現状のまま据え置くと、郵税の値上りがあると緊急処置として其の発行方法の変更をなさざるを得ないと思われる。(一例として年会費納者は二回、未納者は一回とするような方法)

一、大会開催時期について  
八月最終土曜日か従来のように最終日曜日、  
一、新卒業生記念品  
一、本年同様認印を贈呈

一、新校舎と同窓会事務室  
本校移転が決定したので同窓会事務室の件について法人側をお願いすること。

一、(不日)会長が法人に対してお願いする  
一、同窓会事務の将来について  
一、同窓会事務の将来について各理事に検討し戴くこととする。

## 甲陽学院同窓会

### 高商工専グループの集い

#### 桑田 正 造

昭和十五年春、甲陽高商の校舎が、香榎園浜に落成・開校されてから、三十有五年の歳月が流れました。今春を期して、甲陽高商・工専各期卒業生が懐かしい母校に集まり創立三十五周年記念同窓会をやらうではないかとの声が挙り、昨秋、十一月十五日午後六時から、小社、桑田硝子(大飯店会議室)において、發起人会を開催、第一期生より、木村郁男、杉山利郎・高田裕・小菅和夫・北村広・谷山幸三・財田良夫・桑田正造の8名、二期生より、越智滋・井上新一・和田久弥・米田敏雄の四名、三期生の大田盛治、加登衛の二名四期生より小林早苗一名の計十五名が会合、協議の結果、  
☆日時 昭和五十年四月二十日(日)  
午後一時〜三時

☆場所 甲陽学院中学校講堂(香榎園)  
☆対象 甲陽高商・工専卒業生  
☆申込先 会費 2,000円を、  
西宮市中渡原町2-15 甲陽学院中学校 中島 久先生宛に現金書留で三月二十日までに送り下さい。  
当日は、原同窓会々長・甲陽学院の小河現校長・合田相談役を始め、当時の恩師もご出席を願う手筈にしてあります。

甲陽学院同窓会が、五十周年を記念して、昭和四十二年春に総会を行われまして、昭和と、少々動機を異にしますが、甲陽高商・工専独自の共通した懐かしさが湧きあがるのではないのでしょうか。特に、杉山・和田・大田の諸兄等が、熱心に提唱されたのが、動機となつたのです。これを契機に、住所の再確認を、各期の幹事に早急にご協力願ひ、現甲陽学院同窓会の方々のご理解を得て、二月上旬に発行されるこの「甲陽だより」に、本文の掲載をお願いいたした次第です。

当日は、甲陽高商一〜四期生、甲陽工専一〜二期生各位には、ご参集のほど懇願致しておきます。  
(甲陽学院同窓会副会長・高商一期卒)

# 夏季大会報告

三月二十五日の理事会並びに総会において、夏季大会のあり方について色々討議が行われました。そして本年は、思い切った若い層に企画をまかせてはどうか、と提案され、企画委員長を高垣副会長にお願ひしました。五月十三日、約二十名が集って第一回の企画委員会がもたれました。その結果、本年の夏季大会は

・八月二十五日(日)  
高校々舎において開催。

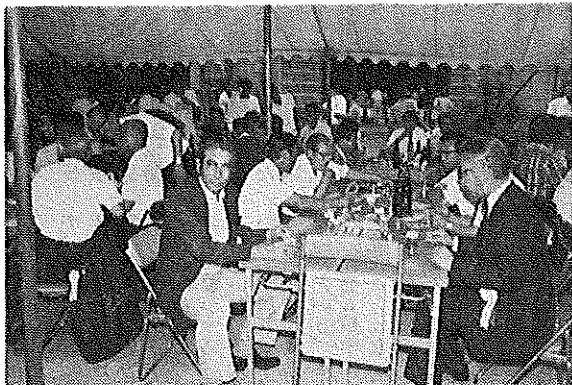
・本年(五五回)卒業生を中心に企画を進めよう。

と決定されました。以後、八月十日まで、大小あわせて六回の企画委員会を開き

・予算二十万円  
・食べ放題、飲み放題  
・グラウンドでゲームを並行させながらのカーデーン・パーティ方式

で実施することを基本方針とし、これに沿ってプログラムの大綱が決定されました。

八月二十一日に準備委員会をもち、諸準備の打合せをしました。それに従って、前日八月二十四日には約三〇人の五五回生がテント張りその他の準備を行いました。尚この日、食堂の永井氏のお骨折りでグラウンドの一部にパーベキュー用のかまどが完成しました。当日八月二十五日の午前には約四〇名の五五回生が前日に引続いて、ライン引き・机椅子の運搬・配置、また一部のものは食堂でオーダーの盛付けの手伝いなど準備万端を完了しました。当日は台風の影響で、午後から天気は荒れるという予報が出ておりましたが、



大会の方は予定通り、午後三時頃から四張りのテントを中心に、プログラムに従って進められました。高垣副会長の開会の辞、原会長の挨拶、辰馬理事長・小河校長・林校長のお話とすすむうちに、ぼつりぼつりしていたのが、次第に雨足がはげしくなり、友国副会長の音頭で乾杯を終った頃にはかなり烈しい降りになりました。このため、準備してあったゲームになかなかかかれませんでした。テントからは時々ざあざあ水がこぼれ、遂には足許にも水がおしよせる始末になりました。

そこで急遽会場を食堂に移すことにし、のみもの・オールドブル・おつまみをセルフサービスで運んで頂いて、会を続行致しました。食堂では軒下にもはみ出して、三三五五、気拍をあげるグループあり、またあちこち渡り歩く御仁もあり、計画外ながら結構同窓会の雰囲気は盛り上りました。五時頃応援団長のリードで高校々歌・学院歌・応援歌を声たからかに斉唱し続いて静先生と藤井副会長の音頭で学園万才と同窓会万才を唱えて閉会しました。

閉会時には、雨もまだ烈しくグラウンドも一部水びたしになっており、参加の皆様には大変ご迷惑をお掛けしました。悪天候の予報にもかかわらず、それを押しつけて母校に参集して頂きました同窓の皆様方に対し、おくれながら厚く御礼申し上げます。

なお、今回の大会にも、例年の通り、辰馬本家酒造より白鹿を、そして三五回桂・松本両氏のご尽力でサントリーより生ビールをそれぞれ多量にご寄贈頂きました。また、二八回清水氏に例年のように何かと甘えて、緑の下の力持ちをして頂きました。また参会された方は、すでにお気付のように、本年

は同窓会を専門の方にお願ひ致しました。これは四五回揚野氏のお骨折りで可能になりました。事でも、大阪放送の榎本アナウンサーをお呼びすることができました。突然のプログラム変更にもかかわらず順調に会を進行することができました。一因がここにもあるかと思っております。

最後にどうしても書き落せないことは、本年(五五回)卒の諸君のお骨折です。上に一部述べましたが、山村君を中心を終始一致団結して、企画・準備の段階から最後の雨に打たれた机・椅子の後始末まで、この夏季大会運営の機関車として働いてくれました。台風のため、その骨折りの全部は実らなかつたのが、大変に残念です。ここに記して深くその労を謝したいと思ひます。有難うございました。なお参加者数、収支関係は左記の通りです。

### 参加者

- ・特別会員(法人、母校職員、母校旧職員) 二二名
- ・一般会員 五六名
- ・学生会員(除五五回卒) 四四名
- ・五五回卒会員 八〇名

### 収支

収入	支出
・夏季大会参加費 一八九、五〇〇円	・企画、準備並に当日諸費用 計 二七五、〇五〇円
・同窓会経常費より 八五、五五〇円	
計 二七五、〇五〇円	計 二七五、〇五〇円

## 同窓会推移について

(一回卒) 合田 孝治

九月二十六日理事会で本年の夏季大会及び今後の甲陽だより発行と年会費の件について種々協議した。

本年の夏季大会は五月十三日の第一回打合会より本年度卒業の同窓生を主軸として開催することに定め幾度かの会合で案を練って曾

てなかつた気持ち良い朗かな大会となった。惜しいことに天候に災いせられて予定の行事が全部出来なかつたけれど今後の大会のやり方について一つの方向を指示されたような気もするし同窓会のあり方についても本当に良いことであつたと思う。

甲陽だよりの発行は年会費の納付状態と大きな関連性がある。現在のようには年会費が会員全数(住所不明を除き)の三分の一足らずでは若しも郵便が上ったときは年二回を発行することが不可能となり折角の同窓生と会との連繋がなくなる恐れも生れて来る。最悪の場合対象者を年会費納入者のみにする処置を講じなければならぬのでないかと考えさせられる。

四十三年度に年会費制度を設けて、同窓生の協力を願ひして漸次協力者も増加しつつあるが、未だ三分の一を割る状態で一人の協力者が都合三分の負担となっている現状である。

卒業すれば学校、同窓会は遠く自己より離れた存在の如く思うであろうが、実際は長い一生のうちには何かにつけて関わりが絶えないものである。私自身五十周年のときより五カ年また二年において再度この同窓会の事務をやってみてよく判るのである。

同窓会とは何の拘束もない会であつてお互いが同じ権利を持って老若の差なく育てる会だと思ふ。折角軌道に乗った甲陽だよりを、絶えさせないよう、協力を願ひ次第です。

新卒業の同窓生には昨年に引続き認印をお贈りするに、現在の校舎も移音等の公害より守るため法人のご尽力により移転せられるらしいので同窓会事務局移転のことなどを協議した。

何はともあれ、同窓会を育てる善悪ある同窓生が多くあることを祈る。そして多数の協力者を得て在校生との連りを強めるために在校生のクラブ活動にも幾分かの援助が出来るように努めたいものである。

ご参考までに現在甲陽だよりの発送の各回卒業生数別と年会費の納入状態を別表のようにとりまとめました。

卒業回数(A) 発送数(B) 年会費納入数(C) (昭和四十九年十二月一日現在)

Table with columns A, B, C and rows for graduation counts, shipping counts, and annual fee payments. Includes a summary row at the bottom with totals.

会員名簿整理についてお願い

たびたび記載することであるが、甲陽だより発送の都度前回届いて今度返送となるケースが非常に多い。真面目に年会費を協力なさっている人の会費までが無駄になるといふことを今少し考えて住所変更の場合は是非知らしてほしいものです。本人自身はなんでもなように考えているのかも知れないが、何かのときに友人の方が必要なときがあるので。

年会費の協力も年々殖えてはいますが、まだ三分の一に足らずで、つまり一人が三人分の負担を持って頂いているわけですが、今回も百八十人の発送で郵便料三千六百元を無駄にしたのです。真剣に考え直してもらいたいこととです。

- 次の方々が七月発送で返戻のあった方です。
第三回 泉 義夫
第四回 太宰 守、越野重一
第六回 森本春吉
第七回 太田利男
第八回 上岡敬一
第九回 田中七兵衛
第十回 岡本包男、沼野大彦、源太慶蔵
第十一回 畑中実三

- 第十二回 田中真次
第十三回 末松賢二、中井次郎丸、塩出竜一
第十四回 藤田 勇、辻 圭吉
第十六回 丹治倉三
第十八回 福井 浩、尾上早苗、市川 弘
第十九回 宮地 潔、福井俊郎
第二十回 竹内直彦、田中浩之、村田 滋
第二十一回 岩崎誠也、末永英一、白井貞三
第二十二回 日下洋仁郎、東 秀俊
第二十三回 野田広也、中村 厚、有馬 寛
第二十四回 白岡 保、久津那浩三
第二十五回 山中成一
第二十六回 曲田準一、藤井孝央、伊藤 譲
第二十七回 綿谷幸次郎
第二十八回 栗原正巳、岩井洗浩、熊谷泰一
第二十九回 高野昭二
第三十回 石本誠太郎
第三十一回 茶野一男、田中豊助、黒川慶昭
第三十二回 吉村拾男、茶谷 保
第三十三回 西垣 浩
第三十四回 詠田善治、福井直彦、山村恭造
第三十五回 余部武男
第三十六回 松浦公良、伊達 恂、畑井 博
第三十七回 竹原須三郎、三谷彰義
第三十八回 中西賢三、鈴木 博
第三十九回 飯田昌弘、浜尾 仁、矢田 健
第四十回 中野正道
第四十一回 矢野篤太郎、島 敏弘、光永三郎、星野 彰
第四十二回 宇賀克夫、上田弘嗣、酒井重治
第四十三回 内海道郎、岡 襄二、田中利広
第四十四回 奥 啓一、梶村慎吾、梯 正英
第四十五回 万年 隆、佐藤 正、直場徳有
第四十六回 青木一弘、小村倫弘、北条栄造
第四十七回 森垣 肇、村山浩一、林 一郎
第四十八回 川原 宏、武部幸一、関 昌雄
第四十九回 吉田興一、守殿貞夫、木谷田弘明
第五十回 象井日出夫、河野弘志、野中芳弘、石川恒夫、玉津光洋
第五十一回 遠藤 宏、小田中健、尾崎郁也
第五十二回 久米一郎、桜井雄三、永滝信一
第五十三回 林 恒俊、松村矩雄、遊川健三
第五十四回 中島利清、本間 一郎
第五十五回 市田強二、奥山哲夫、藤好修二
第五十六回 岩田博次、今井正俊、池田幹秀
第五十七回 小川弥寿平、郷田賢治、佐藤清五、谷 直人、中島裕之、林邦彦、田中真征、中田泰洋、山本敏雄
第五十八回 魚水敏行、乾 正弘、板村哲也
第五十九回 佐藤啓一、前川卓瑛、米田秀彦
第六十回 野上 陽、井手本克郎
第六十一回 吉良康宏、岡本光市、播摩義春
第六十二回 岡上真治、大西 寿、小原秀夫
第六十三回 塩田和生、小林謙一、真嶋健一郎、皆見 夫、松本文朗
第六十四回 大堀一平、左右田和雄、佐藤哲夫、長島久明、東 透、吉倉 広幸
第六十五回 井村俊郎、稻本博英、上原伸一、高嶋晴生

関係者による懇親会
恒例による三者合同の懇親会は旧年十二月三日(火)午後六時より合田孝治氏のお世話によって元町の老舗「かき十」で開催された。
法人からは辰馬理事長、学校からは小河校長、宮川、村上両教頭が出席されたが、当日急用のため原会長、友国、高垣両副会長が欠席されたため桑田副会長が同窓会側を代表され挨拶をされた。
会食をするに先だち合田氏より同窓会の現状ならびに学校に対しての要望がなされ、伊東相談役の乾杯の音頭でなごやかに懇親会が行なわれた。
席上、今夏の会員大会が雨のため折角計画したスケジュールが殆んど行なわれなかったことを残念がる声があちらこちらで話題になった。来夏の盛会を一期期待したことであり。
なお当日の参加者は校内幹事八名をふくめ十六名であった。

# 会員だより

## 甲陽会だより

(第一回卒)

懇親旅行も回を重ねて五回となった。今回は初めて夫人同伴を実行したのであるが三組に止まった。

場所は吉田長敬氏のご努力により飛騨の高山とし、宿泊地は古川となった。天候には恵まれたが初秋であり、朝夕は肌寒く感じた。名古屋で東西相寄り、急行とは名のみの鈍行、ローカルカラー豊かな列車で古川へ。二十一名参加の予定が十八名となったが、一泊ともなれば差しつかえができるのかも知れない。

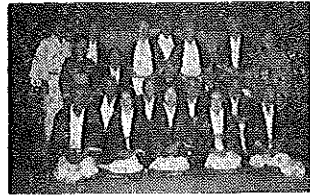
車中は結構賑やかで、相不変の昔話が多く、三時間半の長時間も退屈することなく過ごす。宿は家族だけで経営せられているので親切でもあり、心ゆき届いた料理やもてなしに全員満足したのではないかとと思う。

夕食後宿の近くにある和嶺の手造り職場見学に出掛ける。近來多数の人が訪れるのか、堂に入った説明で一時間近く拝聴した。翌日古川より高山へタクシーで行く。車中運転手の説明を聞きつつ、田舎道を走る。霧こもる日であったのに今日位良い秋晴れの日は無いと予言したが、午後はその通りになった。途中合掌造りを見学。堅牢に組まれた屋根裏には感心した。間取りその他も良く利用された造りであった。

高山市中は日下部民芸館、陣屋、と高山名物の祭り屋台の保管してある場所を見、古い軒並みも歩く。例の朝市では自分等男はとまかく同行の婦人達は新鮮な野菜と安価を羨ましく思ったことだろう。

高山駅で各々別れた。乗る列車の関係上、行楽シーズンのブームに乗った高山見物では已むを得なかった。宿の夕食時に甲陽会基金募集の事を話題とした、意味が不徹底だったせいもあるが、不

賛成の人も割にあることを報告した。やはり何事も独善的には考えられないものだ、それにしては残念なことは同じ年に甲陽に入学したから、何かにつながりがある、同じ仲間、会合だから参加できないのなら残念だが、こんな都合だと云って返事位いくれても良いのにと、いつも思わせられる。



基金のこともこれに端を発して有終の美を飾りたいと思いついただけで、これは各々の考え方が違い、後々のことまでは必要ないとせられる人もあって、仕方無いことだとは思ふ。前述のように同期の同窓であることには変りないのであることにお互いに忘れないようにしたいものだと思ふ。(合田生)

## 紫水の集い

去る十月十二日(土)秋たけなわの六甲山麓白鶴美術館の階上をお借りして甲陽草創期の同窓相会して旧情を温む。学窓を離れてまゝ半世紀、世の風雪に耐えよく残存した面々十四名、わが内なる声か、彼の声かだれが呼びかけるとなしに親を恋う心が君を私を白鶴の会場へ馳せ参じさせた。待つほどに、対面するほどに、考案のうちに童眼を発掘して健在を喜び、ことばなくして相語る。これまた生の歓喜でなくてなんであらう。参会する者

- 合田孝治 (1)
- 伊豆真治 (2)
- 伊藤喜一郎 (2)
- 小島俊二 (2)
- 曾我了雲 (2)
- 永井治郎 (2)
- 高橋善雄 (2)
- 増田武兵 (2)
- 立花達雄 (2)
- 金谷熊雄 (2)
- 山野井義 (3)
- 丹下英樹 (4)
- 豊原大洞 (5)
- 青木重雄 (8)
- 柳原博 (20)

夜来の雨に洗われて秋色いよいよ鮮かに、閑寂のなかに生気躍動、沈黙のなかに追憶の波瀾しきりに起る。

想い新たな故西郷亭君故伊元貞三郎君の両君、さては故石上哲良、小石辰雄君のことどもである。君暫し、待て、われらまた再び会う日まで。

まずはじめ合田氏の同窓会の近況について伺う。この人まことに好漢、底ぬけに明るく献身して己を忘る。永生の人か。つぎに甲陽に現職していられる柳原先生(20)の甲陽の現状について説話を聞いたが筆者、生憎耳遠くして鮮明に聞えず、努力して甲陽校地の移転の話をうかがい感慨無量であった。アメリカのような広大な土地をもつ国でも都市の未来像を描くこと日本の狭隘な国土に住むものより先覚の展望意欲の旺盛なのはどうも文明のうえでは日本人が一步遅れているようである。行き詰ってから問題視されるのは日本人的欠点というべきか。

曾我了雲氏は甲陽の生んだ傑物であるが、在学中最も薫化をうけた方に田中孝雄先生を挙げ、静座すること親鸞聖人へのまなこが開かれた述べをしていられた。当時伊賀校長は自由と個性教育を教育のモットーとしてられたが、草創の間一主義の教育の型にはめ込められた子弟を脱皮させるのに自然に直接させ、自然から人間の本性を開発させられるより手がなかつたのではなからうか。先生たちのなかで別段教育の方針について校長の真意を解する方というよりも人柄の立派な方

### 甲陽第二回生会(於 白鶴美術館)



- 立花夫人
- 金谷 熊雄 2
- 金谷夫人
- 豊原大洞 4
- 立花 達三 2
- 高橋 善雄 2
- 小島俊二 2
- 永井 治郎 2
- 増田武兵 2
- 丹下 英樹 4
- 合田孝治 1
- 山野井 義 3
- 伊藤喜一郎 2
- 伊豆真治 2
- 青木 重雄 8
- 曾我 了雲 2 (敬称略)

## 山窓に水清し

## 甲陽同窓会

昭和49年10月12日  
 白鶴美術館  
 立花達雄  
 伊藤喜一郎  
 合田孝治  
 高橋善雄  
 小島俊二  
 青木重雄  
 永井治郎  
 丹下英樹  
 山野井義  
 金谷熊雄  
 豊原大洞

が多かつたようだ。一粒の麦を育てたことがいま百千の麦粒をつくりつつあるのはふしぎというよりほかない。寡黙深重であつた小島(荒木改め)氏が数学を専攻し、濃厚控え目な伊豆真治君が教育に政治に企業に独自の世界を展開され社会と人事に奥深い蘊蓄を具えられたことも決して偶然ではない。高橋善雄君というより善雄さんと呼び慣れてきたあいだ柄であるがこんな真摯な温みのある人柄を生んだのは家庭の教育が重みをもっているが、甲陽のもつ草創期の未型成な教育が魂の薫陶に力があつたと思える。教育とは教育しないことというパラドックスは味うべきだと思ふ。

クラブ活動も当時は明確なオリエンティンも無く未分化の分化の状態でのまにわたしが水泳部長に任命されたのが皆目わからなかつた。なかでも割合はつきりしていたのは野球部とテニス部であつたのだろうか、他は部員の主体的な動きはなかつた。宇井、

岡田のバッテリーが全国征覇をとげたことは卒業してからであったが大きな生活に影響のあったことは事実で苦勞のかたまりであったことが察せられる。

増田武兵衛も兵庫庫小野町で開かれた県内テニス大会で社会人を相手に優勝して甲陽健児の氣をあげたことを誰が記憶しているだろうか。

とにかく人間の歴史はいかなる事業をなしたかというより、いかなる心術で生きてきたかに永遠の光輝くものがある。行為などというものは無知の世界を脱せぬかぎりはおかしく消えゆくものであるが、それが心術として聖なるものに属してなされるときに永遠の光をもつ。

豊原大潤氏は浄土真宗の寺に生れた方である。大阪医専を出られた後に各地の貧民を相手に医を通して仏行を行じてこられた。選ばれて西本願寺の総長として大世帯をまかされた。すらすらの真諦に徹してこられたのである。

多忙のなかを出席下さって永生の道を語っていただいた。人間の住所を知った欲びを安心という。師は科学的な着眼から安心は安眠と解釈されて難問をわかりやすく説かれた。

仏一音演説法衆生随類各得解ということがあるが、参集者は各人各様に解して傾聴したことだった。不動心を永遠の生に立ててこそ同窓会の地盤もいよいよ堅いといえようか。

(金谷記)

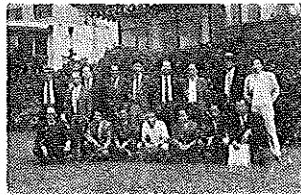
後記本会開催について終始して中心になって世話をされ、ご夫人までお手伝いをしていただいた立花達蔵氏に深く感謝の意を表した。

### 第三回橘会の記

戦争と平和、混乱と狂騒のうちに、ある時は国の指導者に目標らしいものを与えられ、亦ある時はデカダンスの淵に沈みつつ、うかうかと時を過ぎてしまった我々だけれど、卒業して三十二年振りに出会うと見ると、大變

な時代の流れを乗り越えて来にしては、お互に人間の年輪を感じさせるようになっていくが(中には偉くなった奴もいる)昔と変らないうぬしい仲間たちだった。

昭和十七年三月に甲子園で分れたK組の仲間たちが渡辺君の世話で、今年も五月十八日十六時、ピワ湖ホテルに集合、真夜中まで酒をくみかわし、「オイ、オ前」の調子で、ワイワイ、ガヤガヤと、時の経過が分らない位だった。



「推琴温泉のトルコ風呂に出掛けよう」などの不逞な緊急動議も出たようだが、結局は、解散後四、五人づつの雑魚寝で昔話や卒業後の生々しい体験談によるY談などに花が咲いて、眠る間がない有様だった。

藤田先生(今年から名古屋の相山女子大へ移られた)は本年も参加され、相変わらず、あだ名(坊ちゃん)とお呼び若々しさで、どちらが先生か生徒か分からない位だった。(それ程チヂイになった奴もいる。)

翌十九日は遠足気分です遊覧船で湖上の涼しい風を満喫の後、十二時すぎ大津駅で明年の再会を約し解散した。

社長、重役あり、自営の先生、オヤジあり、亦平社員もいるが、それぞれの立場で立派に甲陽スピリットを発揮している。

今後もお互いに先づ健康に留意して頑張ってくださいたいものと念願する次第。

当日参加者(二六名)

藤田福夫先生

社長重役一犬伏、奥野、大月、西島(田近藤)高畑、筒井、樋口、宮津渡辺

自 営一入間田、坂田、溝口  
サラリーマン一井本、稲葉、鳴若

(六月十一日 稲葉記)

### 35 回 生

### 20周年記念同窓会

それは20年の歳月を感じさせない「集い」であった。

「おい」「おまえ」と呼ぶ声は10代のそれであった。

戦後の荒廃から立上った昭和20年代の6年間の想い出が交錯した3時間であった。

諸先生方の学舎での、運動場での訓育が、我々の今迄の、そしてこれからの「生きざま」に強く、深く、たくましく生きづいていく。

我々が母校を愛せ、そして誇りに思え、又第二の自己と云われる友を持てた事は、なんと素晴らしい心の糧だろう。

この日、みんなの心にささやかな灯がともされたような思いであった。なつかしい灯、あたたかい灯、そしてほのぼのと美しい灯であった。

そうです。そんな集りが8月18日宝塚ホテルであったのでした。

参集者37名出席諸先生伊藤、村上宮川、信川会合名

甲陽学院高 校第35回卒業20周年同窓会

一誓約一 再会 以上。



(尾山啓二)

### 甲陽と謡曲

広島甲陽会

大林 豊 治

(旧姓木室、十五回卒)

一年生のとき、国語の担任が横野先生。先生は観世の謡が御自慢であった。たまたま、観世流の名門、上野朝太郎君が入校してきた。文芸会で上野社中の方々の御付合いで、番囃子「羽衣」のシテを謡われた。かん高い黄色いキンキンした御声が、今も耳底に残っている。これが私と謡曲との、初めての出逢だった。なんと眠たいものだなあというのが、正直なところ率直な感想であった。

それからというもの文芸会の都度、上野君の仕舞が舞われるようになった。ある時、これは異例な事ですが一と前書がついて、能装束で「巴」の仕舞が舞われた。今でも私の想い出の中で、長刀をひらめかした美しい能人形のイメージが、キラリ、キラリと舞っている。

その後何年かたって、上野君の広島公演があった。当時謡を習いはじめていた私は、エチケットに従って、彼の楽屋へ挨拶に行ったことがある。優雅な髪目目の紋付に仕舞袴をつけた青年楽師が出てきたのは驚いた。それがきっかけて、商用で上阪したとき、戦時中の灯火管制で薄ぐらい、甲子園ホテルのバーの片隅で、彼と一晩飲んだことがあった。一年生のとき、私は音楽部に入っていた。当時の音楽部のキャプテンが大西信弁という方であった。ロッカーが私のすぐ隣りだった。この人のタクトで、ハーモニカをブカブカやっていたのである。今にして想えば、彼は京観世の名門、大西家の御曹子ではなかったかしら。

さらに私の二年先輩に当時中村弥三郎、只

今はワキ方福王流の家元福王弥三郎さんが居られた。下校の途中、上甲子園あたりのポプラ並木の小路で偶然お逢し、同行の福王さんの同級生で、私と一緒に通学していた米田敏行さんに、一寸紹介してもらったことがあったような気がするが。

ともかく、甲陽時代、謡曲の名流名門の方に取かこまれた環境の中で育ったわけである。しかし本当に謡曲を初めたのは、さらに数年の後である。

私の従兄に海軍の中尉さんがいた。広島のある旧家の娘さんと結婚することになって、私の兄が田舎の親類の爺さま婆さまと一諸に結婚に参列した。さて披露宴になって、先づの方は、上手か下手かはわからないが、ともかく取っておきの一番が、次から次へと出てくる。こちら新郎側。まさか安来節を出すわけにもゆかず、赤面、閉口、頓首、汗顔、ホウホウの態で、にげ帰ってきた。さあ、それからと言うものは、兄の号令一下、兄弟全部、謡を習えということになった。

兄は勤めの関係上、神戸にいたので親世流。私は家業を手伝って呉にいたので、今は人間国宝になっておられる豊嶋十郎師について金剛流。弟は慶応の学生で東京にいたので、十郎師の兄の要之助師について、同じく金剛流。まさに一家皆謡である。

終戦とともに家業の海軍用達もペラになった。それから三十年。星の流れと共に、私の人生も様々に変化した。戦後、戦時中代理店をしていた会社に入れてもらい、私も勤人になった。仕事の関係で様々な土地に住んだ。ある時は金沢、またある時は東京、さらに大阪、定年が近くなったので郷土の広島。しかし謡曲は常に私の側にあった。勤人をしていれば憂いごと、つらい事。それがなかったと言えど、生流の地謡で「屋島」を舞った。東京の流友と隅田川のはとりの料亭で「隅田川」を謡っ

た。広島へ帰ってくると、甲陽で二年後輩の堤正孝(旧姓山本)の素晴らしい「景清」の名調が待っていた。そんな想い出の方が、まず先に浮んでくる。仕事上の憂かりけること、つらかりし事は淡く霞んで、今では想い出そのうにも定かでない。

謡君よ。ありがとう。

只今は、東広島市と名のかわった、西条という所に住み、日曜毎に土地の息子さん達に謡の手ほどきを楽しんでいる。日曜師匠である。私の弟子で、妻の従弟にあたる青年が、昨年、京家の奥さんの実家の母堂の仲人、宗家と縁つづきになる、お嬢さんと結婚した。私と謡曲との縁は、ますます深くなるばかりである。これも若かりしとき甲陽で育ったお蔭か。

こうなれば謡君よ。冥土の果までも一諸に行こうぜ。

だちよう杯

ゴルフ大会

昭和38年卒(44回生)有志

第4回ダチョウウ会ゴルフコンペを11月4日、宝塚のスポーツニッポンカントリックラフで行いました。このコンペは、第44回卒業生が3、4人でコースを回りはじめたのがきっかけです。「あの男は、いま何しとんねん」「ゴルフはうまいんかいな」から、38年卒業組でコンペをやるという事になりました。

コンペ名は、中学時代から高校卒業後もいまだに、人生の師として、お世話になっている中島久先生の愛称をいただき、「ダチョウウ会」と名付けました。そして、今年1月、6人が参加して、第1回コンペを開きました。粉雪の舞う雪中コンペは、志風君が初代優勝者になりました。第2回からは、参加者も11人にふえ、仲間の輪も広がりました。

この回はベテランの藤田(正)君が優勝しました。又、第3回は、7月に泊りがけで淡路島に渡りました。この回から、中島先生にいただいた、高さ約50センチの立派なトロフィーが優勝者に持ち回り制で手渡されることになりました。そして、運送しながら、秋に結婚を控えた畠田君が優勝し、婚約者にのみやげができたとばかりにトロフィーを持ち帰りました。

さて、今回の第4回は、常連の川淵、志風、竹口、野条君らが仕事等の都合で欠席しましたが、福本、三浦(正)君らが新しく加わり、11人で3組に別れて行いました。ハンディ査定は、初参加者自身の申告や、仲間たちの情報で決める方法をとっています。だいたい腕よりも、口の方が達者な連中ばかり、舌戦の応酬でにぎやかなコンペです。

スポニチカントリーは、アップダウンのきついトリッキーなコースですが、細谷君(旧姓掘山)が43、47と成長著しいスコアで、二つのニアピン賞をもらって初優勝しました。

中野、永井両君らは、「あいつは医者のおくせに、患者をほったらかしでゴルフばかりいつとるとちがうか」と、憎まれ口。両君はこのダチョウウ会の発起人で最多出場組でもあります。

あらながら、いまだに3位入賞さえできず、今回も両君は、ドラゴンやニアピン賞だけにかけていました。が、どちらも取れなかったから無理もないことでしょう。



又、何故かゴルフだけはうまい三浦(敏)君が、ベストスコア84ながらもネット72で惜しくも2位。

そして、第3回に初参加し、星野、島居両君と争ってブリービー賞を獲得した筆者、千草君が、その後のいれこみが功を奏したというよりも、スジがいいのでしょう堂々3位に入賞しました。(このくだりを書きたくて、コンペ便りの原稿を引き受けた次第です) 学校を出て、それぞれの道を歩みはじめると、とかく疎遠になりがちです。お互いの近況や昔話に花を咲かせながら、秋の一日、広々としたグリーンを駆けずり回るのもいいもんです。男30才、そろそろおなかの出る年頃。カラダにいいこと何かやってる。ゴルフ愛好の38年卒業の諸君、気のおけない古い仲間でコンペをやるうじやないですか。

最後に、誌面をお借りして、このコンペでお世話いただいた、スポーツニッポンカントリークラブ総務課長である第10回卒業の浅野氏に深くお礼申し上げます。(千草記)

付記 「だちよう杯ゴルフ大会々則」

第三条 本会の事務局は永井鉄工KKに置く  
事務局長を永井 隆氏とする  
八 永井鉄工 | 尼崎市常光寺  
西ノ町一丁目一〇

TEL 06-401-4171  
第四条 本会は原則として第四十四回甲陽学院卒業生によつて構成される。  
但し甲陽学院同窓生は準会員として会員多数の承認をもつて大会の参加を認められる。

第五条 本会々員は甲陽学院同窓生として又ゴルフアとして最高的人格とエチケットを身につけていることが望まれる。

第六条 本会は春、夏、秋大会として原則として年三回開催される。(以下略)



剣友の有志集まる

自動販売機

甲陽剣友会一同

一〇〇円を入れる。チーン二〇円バックす。ガタン、ストンと「ハイライト」が落ちてくる。なるほど便利な世の中だ。何もかも自動販売機の世の中だ。国鉄、私鉄の乗車券、カンピール、カンジュース、キツネウドンからお寿司まで。なお買いにくいポルノ、週刊誌ほんとうに便利な世の中になったものと痛感いたします。

でも、ここで考えると昔の情緒はなくなりました。なるほど八〇円の品物に一〇〇円入られて二〇円のツリと八〇円の品物が出てくれば商取引においては何も異存はないのですがあまりにも単調な気がいたします。

やはり昔、一〇銭を出して、バット(タバコ)を買い、三銭のツリ銭を当時、小町娘といわれた美しい女性から手渡してもらった時代のこと、言葉や文章では表現出来なない懐かしみがあり、また深い情緒があったものです。

最初から変なお話を申しあげましたが、実は昭和四十九年十二月五日、私たち甲陽中学校の剣道部卒業生が西宮の市民会館に集まり旧交をあたためました。

その席上話によれば現在甲陽高校三年生有志が相つどい剣道同好会を結成し、毎日その道の練習を励んでおられることを聞き、集会いたしました私達は感激するとともに心強く思った次第です。

なお三年後には夙川方面に新校舎が出来、そのときには私たちの念願であった剣道場も新設されること、心よりお慶び申し上げますと共に私たち剣道部卒業生が終戦後、学校当局へ再三申し入れたことが実現されて微笑んず。

でおりますから、現役の同好会の方々は大いにハッスルし君たちが在学中には新道場建設は不可能かもしれませんが後輩達のために頑張ってください。

私たち剣友会のメンバーは剣道の指導こそすれ、在学生の諸君に対し何ら言葉をほさむものではありませんが、皆様ご承知の通り世界をあげての不況時代のときクラブ活動には一般生徒と違っていろいろと経済的に不自由がおこると思ひ、私たち剣友会の会合では現役の皆様方に試合に行くときの交通費の一部でも考えなければいけないという結論が出ました。具体的なことはいづれ剣友会の幹部の方々と相談の上確定次第またこの誌面をかりて発表させていただきます。

さて最初に書き始めました自動販売機とは何ら関係のないことを申し上げましたが、実は剣道会の世界は他のクラブには比較にならないほど先輩、後輩のケジメがはつきりしているのです。この日、剣友会に参加された方々の中には会社の経営者、会社の重役、医者、商人などいろいろの職業の方々がおりました。しかし当日の会場では自分の肩書きは捨てて一会社の社長が一年先輩の一サラリーマンに対し、先輩、先輩と剣道会の空気をマル出しにして八あゝの時の先輩の顔は痛かったですVと言え、先輩も八あゝの突はスゴかったVといふ簡単に中学時代の心にかえり楽しむ往事の想い出に耽っておりました。この美しい先輩、後輩のつながり、これはほんとうに日本人本来のもので自動販売機ではとても買えないものと思ひ最初書いた次第で真の人間のつながりはただ今申し上げた

財力でもなく、地位でもなく試合の度にともに涙をこぼし、ともに手を握り合った喜び、先輩、後輩のつながりこそ人間の情で、金銭でかえない友情のツナガリ、そのふれ合いこそ甲陽剣友会です。そのためか当日募集された先輩、後輩各位は在学中の話でワイワイ、ガヤガヤほんとうに楽しい一夜を過ごしました。

現役の剣道同好会の皆様方は皆さんの先輩がきずかれたよき伝統を受けつがれ日本の甲陽剣道部へ邁進されることを切望いたします。

最後に当時剣道部担任教師でありました吉田光成先生が日生病院入院中にも拘らず御出席いただき参会者一同拍手のもとにお帰りのごびる約束を果されたいことを祈りいたします。なおこの日出席された方々は左の通りです。(敬称略) 改めてここに剣友会名簿中に戦死、死亡と記入された方々のご冥福を祈りいたします。

- 吉田光成先生。藤高六助(6) 中島清之助(7) 香川 登(14) 森田与三郎(14) 朝倉元三郎(15) 住野修二(16) 八木卓爾(17) 河内忠雄(18) 赤沢 隆(19) 橋本雅夫(19) 丸山喬一郎(19) 永友利博(20) 田原一夫(21) 田和吉郎(21) 中島 久(22) 堀部 純(22) 大内 隆(23) 吉山成馬(23) 大村尚郎(24) 宮本幸次朗(24)

会員消息

(第一回卒) 萩原 淳

甲陽中学当時より将棋に秀れておられ卒業後上京して専門棋士となられ在京名家に出向指導せられ将棋連盟会長も務め、名人戦の挑戦等華々しき棋歴の保持者ですが、去る十一月三日連盟より九段位を贈与せられた。

招待サッカー逆転勝!!

第二回招待サッカーで本校サッカー部強豪初芝高に逆転勝利。

去る九月二十二日恒例の「音楽と展覧の会」当日、去年に引き続き今年も特別企画として招待サッカー試合が行われました。快晴の中みるからによく鍛えられた大型チーム初芝に本校は捨身の健闘をみせました。

後半25分同点に追いつかれたときは、誰もが矢張り本校の健闘もここまでかと思われましたが、その後、本校のエース林、森の動きがよくなり、それに合せてFW岡田、水倉等が活躍し、最後の7分に連続3得点を重ね初芝高を突き放し、見守る多くの父兄、OB、中高在校生から盛んな拍手を受けました。

本校(3-1-1) 3初芝高

主審 木村 直氏(国際審判員)

訃報

井上 正義(第一回卒)

去る七月二十八日逝去せられた由通知を受けました。遺族住所は堺市引野町三丁一五八-八 井上静枝様です。

川口半四郎(高校事務長)

川口事務長が昭和四十九年八月五日、県立西宮病院で急逝された。

戦前、辰馬本家酒造株式会社の中支店長であられた氏は戦後学制改革にともしない新制甲陽がスタートをした昭和二十三年より四十六年までの二十三年間、甲子園の高校で事務を担当された。生真面目そのものお人柄で教職員はもとより在校生からも慈父のように慕われたことは万人の認めるところである。ここに謹んで哀悼の意を表する次第です。ご遺族住所は芦屋市西蔵町6-26 川口次男氏。

# 草創期の追憶 (下)

(二回生) 金谷熊雄

## 草創期の先生方

野田先生は青山学院出の明朗瀟灑な、少しもこだわりのない先生だった。尾道から赴任なさった挨拶のことばが、少年たちの心の底にのこって、七十近くなっても焼き付けられている。これは珍しいことだ。その後幾十もの就任の挨拶を聞いたが、これほど力強いものはまたなかった。曰く「任地に着いて早々にもわからぬが、一にも努力、二にも努力、三にも努力で貫きたい。」先生の面目が躍如としている。その一端は書き取りの採点によく表われている。三、四年になると書き取りの答案の点検といえは並大抵でないことは、経験したものによくわかることだ。どの答案にもミスの数をかき、しかも返されるのが早かった。これは言うべくして、行いえない。野球部長で、選手が野球の練習で勉強をする時間が少いのをよくいたわられたと先輩の立花さんから聞かされたが、有難い人だった。

授業が奔放、空を行く先生は多かったが、長瀬先生の右に出る人は少ない。真摯な限りして教壇に立たれると、一巡り生徒たちをじつと凝視して、「ナポレオン・ボナパルトは……」とはじまる。生徒はその演壇口調の長広舌にひとまじりもなく巻き込まれてしまふ。語るほどに熱は増し、悲憤するがごとく、謳歌するが如く、讚美するがごとく、やがて「今日はこれまで……」で終る。今でも歴史の授業だったのか、なにの授業だったのかわからない。そして少年の心から「ナポレオン・ボナパルト」はさった。

斎藤先生は国語の先生である。ややあごの長い細身の、やさしい先生だった。純真な生徒たちは先生を慕った。生徒のなかには先生の親しさになれて、馬鹿なことを仕出かしてしまった。一部の年長の生徒が先生の教室にはいられるとき、大声を上げて叫んだ。なん

ができた。先生は教壇の上に立って「声をあげたのは誰だ」と難詰せられた。こんなとき、やんちゃな連中は弱い、頭を下げて誰一人あやまるものがない。実に卑怯である。先生は黙して一ことも語らず、沈黙はつづいた。あの声は二人や三人の声でなかった。十人、十五人が和している。当然級長が代表して謝るべきだと少年は思った。五分以上もつたのだろうか。少年はたまらなくなつて先生の前に立った。「先生申訳ありません、おゆるし下さい。」熱い涙がほろりだとして頬を流れた。斎藤先生は「お前もか」と思われたかどうか知らない。静かに教壇を下りて職員室へ帰られた。少年に悔はなかった。級長でもないものがおこがましいとさえ思った。このため悪童からとんだ汚名をかぶせられ、感傷的な少年の心はいよいよ内気になっていったことは事実である。あるとき、綴り方の時間だった。先生は自由題で書かされた。そのときわたしは自由にモチーフを与えられた。そのりて次のように言われた。「わたしはある朝、家を出て海浜を散歩した。人影のない海

辺は、夕べの満潮できれいに洗われた砂浜が遙か向うまで続いていた。そここに打ち上げられた海草や木片があった。わたしは水際とそって真直ぐに歩いた。ふと振り返ると見ると、歩いてきた下駄跡が、うねうねとくねつて残っていた。人は真直ぐに歩いているつもりでもあの下駄跡のように曲っていることを示唆されたものだろう。きわめて印象的であった。生木のようなわたしたちのうえには忘れ難いものがあった。

佐野先生は生物の先生で、わたしたちの担任だった。詰り襟の服を召されていた。担任といっても準備室にいられることが多かった。これとこれという印象はない。研究に没頭していられたのだから。蛙の解剖は、生体のふしぎを実験的に教えられた。地理は古田先生で小柄な色の黒い、地味な先生だった。白墨で絵をかかれるのが上手

で、黒板上には芭蕉翁の奥の細道を行く姿、俳句が出、随処に和歌、漢詩が出て地歴を習っているようだった。とき折悲憤を洩らされた。時まさに第一次世界大戦のブームに世は酔っていた。あるとき壇上から「驕る平家久しからず」と大きな目を開いて語られた。そしてその通り大正のペンキはまもなく訪れて、没落する家庭も多かった。

修身は校長が教えられたり、外の先生が代って教えられることもあった。ダル・ウエブスターの例話は、わたしたちの心をゆすぶったことだった。連達の教師というものは、例話の出し方が巧みであり、少年期の生徒にまたびたりと合った。(大阪の砲兵工廠の所長村岡中将の息子や、吉本興業の長男も同じクラスにいたが、村岡は幼年学校へ、吉本もどこかに消えた。)

当時英語教育はどの学校にも外人教師を招聘していた。二年になってミス・スタイルという英国婦人が会話の先生として来校した。新しく本館の北側に校舎が建築せられて、階下は東から職員室、職員図書室、廊下を隔てて校長室、その西隣りに地理室とその準備室となり、階上は職員室のうえが会話の教室、西の端に生徒図書室ができていた。更に、遊歩道の西の端に、階下が理科室と準備室、階上が図画室であった。会話の教室は職員室の上にあった。このミス・スタイルという先生は、教育者ではなかったように思える。じかに話せるだけの力もなく、機会もなかった。ほとんど印象の薄いものがない。神戸の北野小学校の下のイングリッシュ・ミッション・スクールのミス・スター・ウオーカーのような人が来ていられたら大きな感化を与えたことだろう。総じて外人教師はミッションナリがよい。その後のミス・スター・サービスという方はえらかった。私たちに同志社の創設者、新島襄の伝記を借してくれたり、生駒の向うに自分で鉄筋コンクリートの家を建てて開拓者精神を実地に見せて下さった。

はもう習字はせんでもええ」といわれる方だった。少年は得意になったのはよいが、それで書道の面白さをついに理解せずにすんでしまった。先生はお酒すきで準備室には一升徳久利がころがっていた。その目で見たいことはない。個人的に薫陶をうけたらも悲しい思い出もできたことであらう。悲しいかな満月の夜、ほろ酔い加減で京阪路線を散策中、電車にはねられてなくなられた。その後に見えたのが覆谷先生で、白哲八字ひげの芸術的なおの多分にする人柄であった。首の廻らぬようなハイカラの詰り襟がよく似合って、風が吹くと薄い頭髪がゆらゆらうごいた。ご趣味は日本アルプス登攀で、山小屋で妊婦出産の話を交えて面白く愉快な話をせられた。早口でおしゃべりの先生だったが生徒のなかに喰い入る魅力をもった、しかも進歩的な先生であった。

戴先生の修身、那波先生の初歩の漢文の授業はあまりに定型化して、面白くなかった。動物の辻野先生、国語の木船先生、英語の柴宮先生はそれぞれ特徴のある先生であった。更に漢文の木村先生(通称キヤ)は授業のなかでも、遠足途中でも気分が悪い生徒を念力で治された。同じく漢文を教えた吉田先生はひょうきんな、漢籍知識豊かな先生で頭のとつべんがきれいに売っていた。生徒に対する態度に余裕があつてこの時間はのんびりとした授業をうけた。最後に二年から五年まで担任をしていた。数学の小池先生は通称与三はんで通った。地味な人柄で、叱られるようなこと一度もなかった。淡々とした授業で、かげの世話のきたお方であった。静かに草創期の甲陽をふり返って見ると、そこに自然と人との調和があつた。そこに真の樂園に通ずる学園があつた。子供ごころにいい知識が未来への発展があつた。かぎりなき自由があつた。日進化する内外の自然の歓喜があつた。とはいえず自主的、主体的目覚めにいたるには、まだまださまざまな学園の進歩が残されていた、いわば甲陽精神の芽生えの時機であつたといえよう。